**第１学年○組　　道徳指導案**

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　１年○組教室　　指導者　○　○　○　○

１　主題名　　友情の在り方〔内容項目Ｂ−（８）：友情の尊さ〕　（１時間完了）

　　　　　　　〈資料名　「赤い屋根」　出典：本校校長自作資料〉

２　ねらい

　　母親の運んできたケーキと紅茶をぶちまけた病気の親友（陽ちゃん）に対して、注意した親友（敦夫）と何もできずに悩んでいる主人公の気持ちを比較して考えることを通して、互いの個性や立場の違いに気づき、心から信頼できる友達をもち、互いに励まし合い、高め合っていこうという道徳的実践意欲を高める。

３　ねらいとする道徳的価値

　　自我に目覚めつつある中学生の時期は、親や教師などの頼っていた存在から精神的に独立し、互い

　の心を許し合える友人を真剣に求めるようになる。しかし、心を許し合うとはいえ、お互いに与え、

　与えられる信頼関係を確立することは簡単ではない。特に、中学１年生の段階では、視野が狭く、自

　己中心的になりがちである。相手に対して高い要求をしたり、自分の在り方を省みずに相手の行為を

　責めたりするといったことが多く見受けられる。また、相手の気持ちを推しはかることもままならず、立場の違いがあると相手のつらさや苦しみについての確かなとらえが更にできなくなってしまう。

本時の指導を通して、真の友情とは、お互いが、それぞれの立場を知り、その状況や心理をよく理

解した上で相手の成長を心から願って励まし合い、高め合うことだと気づかせたい。

４　ねらいとする道徳的価値に関する生徒の実態と願い

（１）学級について

　本学級は、明るく活発な生徒が多く、男女の関係なくおおむね仲が良い。道徳の授業では、最初

は一部の生徒ばかりが発言をしていたので、本音を言えるような雰囲気づくりや互いの意見を受

け入れる姿勢を育んできた。

１学期では、自然教室を通して集団としての仲間意識やきずなが深まり、互いのよさを認め合うこ

とができるようになってきた。その一つとして、相手が自分に対して手助けしてくれたことを感

謝するようになってきたことがあげられる。また、友達に対して自分の意見や考えを互いに伝え

られるようになってきた。

　しかし、仲間同士の気安さから、冗談半分でのからかいや嫌がる言葉を平気で言ったり、いた

ずらやちょっかいをかけたりするなど、他者への思いやりが欠如した場面も見られる。自己中心

的な行動や冗談が過ぎるなど、ささいなことから感情の行き違いが生じ、傷つけ合うこともある。

　この資料を通して、立場が異なったときの友情の在り方の難しさについて考えさせ、お互いに

心を通い合わせることのできる友情こそが本物であると気づかせたい。真の友情の在り方や友情

の尊さについて考えさせ、友情を今より一層確かなものにするために互いに励まし合い、高

め合っていこうとする気持ちを育てたい。

（２）抽出生徒について

　　①抽出生徒Ａについて

　　　Ａは明るく元気で友達が多く、学級を盛り上げる存在である。４月当初から授業や行事に積極

　　的に取り組み、自然教室の歌声実行委員や体育大会の応援副団長を務めた。交友関係を見ると、

　　いつも輪の中心となり、楽しそうに過ごしている。ただ、人の気持ちを余り深く考えないため

　　に軽率な言動をとりやすく、知らず知らずのうちに級友を傷つけてしまうことがあった。また、

相手も自分と同じ気持ちでいるだろうという感覚の友達付き合いをしている。自分よりも周りの

気持ちを優先しようという抽出生徒Ｂの考えにふれることを通して、Ａが自分の考えと比較して

考えることを期待する。この授業を通して真の友情とは何かを考えさせたい。

②抽出生徒Ｂについて

　Ｂは思いやりがあり、責任感が強い。誰かが困っているとさっと手を差し伸べたり、相手に応

じて声をかけたりすることができる。現在は男女分け隔てなく接しており、学級の多くの生徒か

ら信頼を得ているＢだが、小学校の頃に友達との付き合い方で悩んでいる。６月の国語の授業で

取り組んだ生活作文では題材を「友情」とし、誰かのために何かできる人になりたいということ

と、学級のいろいろな立場の人と信頼を築きたいという自分の思いを書いた。Ｂの意見を全体の

場で取り上げることでＢに自信をもたせると同時に、視野を広げさせたい。

５　資料について

（１）資料の概要

　主な登場人物は主人公「僕」と陽ちゃん、敦夫である。３人は陽ちゃんちの赤い屋根の上で友情を築いてきた、小学校時代からの親友だ。陽ちゃんは小学校６年生から病気で学校へ来られなくなった。中学校の入学式にも陽ちゃんは出られなかったが、偶然にも３人は同じクラスになった。「僕」と敦夫は先生からいろいろと渡すものを預かって、陽ちゃんちに一週間に一度行くようになる。しかし、だんだん元気がなくなっていく陽ちゃんを見て、「僕」と敦夫は学校の楽しい様子を話すのはやめようと約束する。ある日、おばさんが運んできたケーキと紅茶をむちゃくちゃにぶちまけてしまう陽ちゃん。おばさんは泣きながら片付け、出て行く。敦夫は陽ちゃんに注意するが、「僕」は何も言えずに帰るのであった。その後、「僕」は陽ちゃんちへ行けなくなる。敦夫は僕を誘うが、歯切れの悪い返事をする「僕」にそれ以上何も言わない。陽ちゃんのことを心配しつつも、陽ちゃんに会う自信もなく、今どうしてよいのか困っている「僕」の葛藤が描かれている。

（２）「耳をすまして、学びを拓く」ための資料の生かし方

　　①資料との対話をさせるための手だて

　　　学級の実態を把握するために事前アンケートを行い、「親友」とはどういう存在であるかを確認

しておく。その上で、「ア　駄目なことやいけないことについては、毅然と注意してくれる存在」

という考えをもつ生徒、「イ　自分が困ったり、つらかったりするときに、慰めたり、助けたりし

てくれる存在」という受動的な考えをもつ生徒を意識しておく。授業の冒頭では、そのアンケー

トに記載した内容を発表させて、資料に入りやすくする。資料の範読の際、読み取りに陥らない

ように、注目させたい箇所（登場人物・発問で取り上げる箇所等）に横線を引いておく。その後、

自分の考えをワークシートに書かせ、深めさせる。

　　②他者との対話、自己内対話をさせるための手だて

　　　資料をもとにした二つの発問に対してそれぞれ「批判論」「弁護論」をかみ合わせながら授業を

　　進行していく。一つ目の発問における批判論に対しては、共感を示しつつ、注意した敦夫自身も、

　　それでよかったのか迷っていることに目を向けさせる。また、弁護論に対しては、うなずきなが

　　ら受け止める。さらに、自分だったらどうするかという視点を交えた発言については評価し、そ

　　ういう視点をもって考えるよう促す。

　　　二つ目の発問における批判論に対しては「行かない（行けない）」という事実だけにとらわれる

　　のではなく、そういう選択をしたことに至るまでの主人公の心の葛藤に気づかせる。最終的には、

　　主人公のとった行動を考えさせることで、互いの立場や個性を尊重しつつ、心から信頼できる友

　　達をもち、互いに励まし合おうという気持ちなってほしい。

③自己内対話をさせるために手だて

　最後に資料には書かれていない話の続きを紹介して、授業をふり返ることで、自分の友情の在

り方を見つめ直し、友情を更に深めていこうとする意欲を高めさせる。

６　板書計画

　「赤い屋根」

　　　　　　　　親友

　　　　　中学…同じクラス

一

**批判　　　　　　　　弁護**

・親友だったら嫌われて　・自分も同じ立場だっ

　も言うべきだ。　　　　　たら同じことをやっ

・お母さんがかわいそう　　てしまう。

　だし、いけないことは　・二人で責める必要は

　いけないと言うべき。　　ない。

二

**批判　　　　　　　　弁護**

・陽ちゃんのことを考え　・自分だったとしても

たら行くべき。　　　　　何もできない。

・接点をもたなくなった

ら友情は成り立たない。

三

一年生の終わり頃までには陽ちゃんの病気もよくなり、三人の友情はいっそう深まったそうです。その間に主人公や敦夫はどんな行動をとったと思いますか？

陽ちゃんの家に行こうという敦夫の言葉に、歯切れの悪い返事をし、結局行かなくなった主人公を、どう思いますか？

陽ちゃんがケーキなどをぶちまけたとき、何も言えなかった主人公を、どう思いますか？

悩んでいる

７　本時の展開

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| 時間 | 学　習　活　動 | ※教師支援　☆評価 |
| ５  １０  １５  ２５  ４５ | みなさんにとって「親友」とはどういう人を指すか。  だめな時はだめと言える(①)  一緒にいて居心地のいい相手  なんでも言い合える相手  言わなくてもわかる人(②)  何をするときも一緒にいる人  困ったときに助けてくれる人  ○資料の範読を聞く。  ○登場人物と話のあらましを  確認する。  陽ちゃんがケーキなどをぶちまけたとき、何も言えなかった主人公を、どう思うか。  ○相互指名で話し合う。  〈　　批　　判　　〉　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〈　　弁　　護　　〉  お母さんがかわいそうだし、いけないことはいけないとはっきり言うべきだ。(③)  陽ちゃんと同じ立場に立ったら、自分も同じことをやってしまうかもと思って言えないのはわかる。(④)  親友だったら、嫌われても注意するべきだ。(③)  あまりの出来事にびっくりしてしまい、動転してどうしていいかわからなくなるのは当然だと思う。(④)  敦夫が言ったのに、二人で責めなくてもいい。(⑤)  陽ちゃんの家に行こうという敦夫の言葉に、歯切れの悪い返事をし、結局行かなくなった主人公をどう思うか。  どんな理由があるにしても陽ちゃんの今の状況を考えれば、敦夫と一緒に行くべきだ。(⑥)  行っても、自分には何にも言えないし、できないから足が遠のくのもわかる気がする。    自分も同じ立場に立ったら陽ちゃんやおばさんの気持ちを考えてしまって行けなくなると思う。  陽ちゃんの本心は、きっと二人に来てほしいと思っているはず。会える会えないではなく、行くべきだ。(⑥)  時間はかかるかもしれないけれど主人公は一生懸命悩んでいる。答えが出るまでは仕方ないと思う。(⑧)  陽ちゃんとの接点をもたなくなれば、友情なんて成り立たない。陽ちゃんが立ち直れるまで通い続けろ。(⑦)  敦夫と一緒に陽ちゃんの気持ちにたって、そばにいてあげたり、笑わせたりしてあげる。  敦夫に引っ張られて陽ちゃんに会いに行く。  主人公が自分や敦夫の思いを手紙に書いて、お母さんに渡す。それが陽ちゃんの心を動かし、また３人の友情が深まる。   |  | | --- | | 互いの立場や個性を尊重しつつ、状況に応じて、友達とのかかわり方を誠実に模索していこうとする気持ちを高める姿。 |   １年生の終わり頃までには陽ちゃんの病気もよくなり、３人の友情はいっそう深まったそうです。その間に主人公や敦夫はどんな行動をとったと思うか。 | ※事前アンケートをもとに、  数人に発表させる。  ※①の意見をもつ生徒を意図的に指名し、その視点を意識化させる。②の意見をもつ生徒について意図的指名をして考えを聞く。基本的には、それぞれの意見を肯定的に受け止める。（①②Ｂ:生かす）  ※前ページ５（2）①の「ア」「イ」に集約できることを知らせることで、次の展開に生かす。  ※注目させたい箇所（登場人  物・発問で取り上げる箇所  に）横線を引いておくこと  で、読み取りに偏らないよ  うにする。  ※赤・黄のカードを用意し、  意思表示をさせることで仲間の考えがわかるようにする。  ※少ないであろう弁護論に対  　しては、うなずきながら受  　け止める。（④Ｂ:認める）  ※親友だからといって許せないこともあるという批判論には、事実、敦夫はそうしたねと言って共感を示す。（③Ｂ:認める）その上で、もし⑤の意見が出たら、切り返して問い直す。（⑤Ｅ:切り返す）また、出なければ、敦夫も自分のやったことの是非を主人公に問いかけている点に注目させる。（③C:気づかせる）  ※病に伏している陽ちゃんの本心を思いやる気持ちに触れる意見には、「やさしい気持ちをもっているね」と温かく受け入れる。（⑥Ｂ:評価する）また、行くという行為を放棄してしまったら、何も生まれないという意見には、まずは、なるほどと共感を示し、その後⑧のような意見が出たら、それを焦点化して、「僕は、今どうしていいか、本当に困っている」という叙述に気づかせ、どう思うか考えさせる。（⑧Ｅ:ゆさぶる）また、出ないようであれば、どうして敦夫は無理強いをしなかったのだろうかと問いかける。（⑦Ｅ:ゆさぶる）  ※抽出生徒Ｂを意図的に指名し、Ｂの友達に対する考え方を語らせることで、周囲の生徒が「友情」について考えを深められるようにする。  ☆「主人公」の葛藤に気づくことができたか。  （発言、ワークシート）  ※ワークシートに自分の考えを書かせ、数人に発表させる。  ※陽ちゃんを思った前向きな  意見を採り上げることで、ふり返りの代わりとする。  ※抽出生徒Ａを意図的に指名  して発表させることで、相手の立場を考えた言動をした温かい気持ちを評価する。  ☆友情を深めることの難しさに気づくとともに、互いの立場や個性、あるいは状況を考えて、互いに高め合える関係を構築していこうという気持ちをもつことができたか。  （ワークシート、発言） |

授業の視点

①　色カードを使い、「批判」と「弁護」に分かれて意見を出したことが、自分とは違った考えにふ

れ、考えを広げる上で有効であったか。

②　（⑧）の意見が出なかったときに補助発問をしたことは、相手の気持ちに立って物事を考えさせ

　るうえで有効であったか。